

「若さで」「続ける」 新ベルマーク大使

板坂菜々乃さん、麻菜華さん、 茉梨菜さん、ありささん

9月某日、三つ子の“営業”活動に同行しました(4女ありささんは学校のため欠席)。大使の平嶺光子さんと、お母さまの朋子さんの運転で、市内の企業や団体を訪ねました。



集合は8時45分、スーツや制服を着て準備はばっちり。まずは鹿児島市教育委員会の教育長・杉元羊一さんを訪問しました。大使の松本哲さんに作ってもらった名刺と資料を渡し、「テレビでがれきの山を見ることは減っていたけれど、現地は地震直後と変わらない景色だった。現地の人に『来てくれただけで嬉しいし、それを伝えることもボランティア』と言われてその重要性に気付いた」と語った茉梨菜さん。

銀行2カ所では、回収箱設置をお願いしました。もし支店にもご協力いただけたら更なる広がりが期待できます。

いつもの活動場所、ボランティアセンターの所長・窪園達一さんにも会いに行きました。窪園さんは「一番力を入れていきたいのは若い世代。小中高校生に比べて、短大生や大学生とはつながりが希薄な部分があるから4人の活動に期待している」と話しました。

午後にはNHK鹿児島放送局の取材を受けました。カメラを前に作戦会議をしながら、納得のいくまでこたわりました。



鹿児島県庁や生涯学習施設にも出向き、終わったのは17時頃。充実した一日を過ごしました。

平嶺さんは「自分の分身が出来たよう。姉妹が代表となって、人とのつながりの幅が広がった」と喜んでいます。

『「切り取る瞬間から被災地支援が来る』が活動のモットーです」と菜々乃さん。遠く離れた鹿児島からでも支援できることにやりがいを感じています。今後の目標を「鹿児島市民1人1点と考えて、60万点を目指すことです。単に集めるだけではなくベルマーク運動の魅力も知ってもらえるように頑張ります」と麻菜華さん。

「ベルマークを捨てるのは、1円玉を捨てるのと同じ」。1枚1枚の価値をそう考えています。現地を見た経験があるからこそその重みのある言葉でした。

真栄平京子さん

まだ真夏を思わせる日差しの9月のある午前。那覇市立小緑小学校(濱崎雅彦校長)のプレハブ校舎の一室で、PTAのベルマーク委員が仕分け作業をしています。その中に真栄平京子さんの姿がありました。

長年ベルマーク委員長をつとめ、協賛会社のラッキーベルやショウワノートの販路を学校に作り、様々なキャンペーンにも参加。学校のために毎年のように冷水機を購入してきました。2人のお子さんが卒業した後も「すべての子どもたちの役に立ちたい」と、引き続き同校を拠点にベルマーク運動を続けています。



数年前、真栄平さんはベルマーク運動の仲間の委員宅を訪れていた時に、くも膜下出血で倒れてしまったそうです。すぐに病院に運ばれて一命をとりとめましたが、「子どもは学校だし、家にいる時だったら助からなかったかも」。今でもMRI診察を続けているそうで、「ベルマークに救われたようなものです」と真栄平さん。

この日は午後から、いま下のお子さんが通う同市立金城中学校へ。3年前の生徒会長選挙で「ベルマークを集めて冷水機を買う」を公約に掲げた生徒が当選しましたが、当時の同校はベルマーク預金がゼロ。協力を頼まれた真栄平さんはインクカートリッジを大量に集め、さらに「これだけでは足りない」と、独自に制服のリサイクル販売を始めました。その売り上げ2万3千円を寄付しに来たのです。



たまったベルマーク預金に制服リサイクルの売り上げを足せば、冷水機が買えます。「もし余ったら、学校で飼っているウサギのエサ代に」。受け取った喜屋武浩司校長は「ありがとうございます、みんな喜ぶでしょう。ベルマークで買ったことをちゃんと掲示します」と、さっそく注文書に校長印を押していました。

真栄平さんのお子さんは来春卒業だそうです。「その前に冷水機購入を実現できて良かった」。子どもたちは次々と巣立っていきますが、「これからもできるだけずっとベルマークの活動を続けたい」と真栄平さんは話してくれました。

播磨灘の島で一輪車講習会

姫路市立坊勢小で日教弘

兵庫県の姫路港から定期船に乗り込むと、30分ほどで播磨灘に浮かぶ坊勢島(ぼうぜじま)に着きました。秋空の広がった9月11日、人口2,100人余り、漁業を主な生業とするこの島の姫路市立坊勢小学校が、今回の「一輪車講習会」の舞台です。

主催したのは、学校の先生たちがつくる公益財団法人・日本教育公務員弘済会(日教弘)。今年は5月～10月に岐阜、鹿児島、岩手、福島、兵庫、愛媛の6県で9回の講習会を開いています。



インストラクターの鈴木奈菜さん、須郷真弥さんは、国際一輪車競技大会で優勝経験を持つ元トップ選手で、体育館に集まった全校児童128人を前に華麗なスピンやペア演技を披露。「ワーン」と驚きの声と拍手がわき起こりました。

校庭に場所を移し、4年生20人への実技指導が始まりました。全員が初心者です。「姿勢をよくして」「土踏まずじゃなくて、つま先をペダルに載せて」。最初は手すり代わりの鉄棒にしがみついて

いた子どもたちも、1時間半の講習を終えるころにはメキメキ上達。鉄棒に片手を添える程度でスイスイと進める子もいました。

池田湊斗(みなと)くんは「前に進むのはまだ少し難しいけど、ちょっと乗れるようになった」と目を輝かせ、荒木心那(ここな)さんは「最初は不安だったけど、楽しくできた。次の日曜日に友だちと『練習しよう』と約束しました」と話してくれました。

坊勢小には、学年全員が一度に使えるだけの台数の一輪車があって、校庭の端には平行棒のような練習用手すりも完備



しています。高坂英樹校長は「教えられる教諭がいないので活用できていなかった。練習用手すりの辺りも草ぼうぼうで、4月以降、私が3回も草刈りをしました。今後はきっと、雑草も育たぬほど轍(わだち)の目立つ練習場に一变しますよ」とうれしそうでした。

クモといえば「8!」

糸魚川・根知小で「クモ教室」

クモって、ホントはいいヤツだったんだ!——。新潟県糸魚川市立根知小学校(田中敦校長)で9月13日、とかく嫌われがちなクモに親しむ出前授業が開かれました。ベルマーク財団の地校支援「理科実験教室」の一つです。全校児童40人の前で「奈良市から来たスパイダーマンです」と自己紹介したのは、日本蜘蛛学会員のせきねみきおさん。全国各地でクモ観察会を開いているそうです。

一昨年暮れの大火からの復興が今も続く糸魚川駅前を通り、バスで約40分。せきねさんは朝8時過ぎに根知小に着き、まずは軒下や茂みなどで、しらみつぶしにクモを探しますが見当たりません。開始時間が迫る中、校庭を囲む潤れた側溝にたくさんのナガコガネグモを見つけ、ひと安心しました。

授業の最初はクモの「絵描き歌」。「クモといえばハチー!」と、せきねさんの愉快な声が響きます。クモの体は頭とお腹に分かれ、○を二つ重ねた8の字の形。足は8本、目も八つ。説明を交えながらどんどんクモの絵が出来ていきます。「クモの天敵は?」と尋ねると、子どもたちは「トリー!」「そう、鳥だね。でも他にもいるんだよ。それは蜂」。オチが付



いたところでクモの絵も完成しました。

続いてクモの網の標本作りに挑戦。まずは小枝などでつついて主に退去願ひ、白いペイントと液体糊をスプレーで吹きかけ、紺色のケント紙を当てて貼りつけます。仕上げにラッカーをスプレーして固定すれば出来上がり。最初はおっかなびっくりだった子どもたちも、しばらくすると夢中に。「そっちの網の方がカッコいい」「あ、切れた」「クモが逃げてくれない」……。子どもたちが捕まえたクモの名前は、せきねさんが瞬時に言



い当てます。「さすがスパイダーマン」と先生や保護者もびっくり。名前が分ればクモは逃がします。

最後は体育館で映像を使ったクモの話あれこれ。松尾颯くん(5年)は、「いろんなクモの名前が分かって面白かった。側溝にあんなにクモがいるなんて、今日まで全然知らなかった。また網の標本作りたい」。すっかりクモが身近になったようでした。